**「オリンピックと平和：その理想希求の足跡と現実」**

**舛本直文**（首都大学東京・プロフェッサー講座推進委員会委員長）2012.12.01

「平和の祭典オリンピック」という表現をよく耳にされるであろう。しかしながら、何故オリンピックが平和の祭典であるといわれるのか、それを知っている人は少ないのではなかろうか。一般的には、オリンピックとは4年毎に開催される世界最高のスポーツ競技大会であるとしか思っていない人が多いように思われる。

　オリンピックと国際平和を結びつけたのはピエール･ド･クーベルタンという人である。彼はスポーツと芸術を通じて心身ともにバランスのとれた若者を育て、そのような若人達が4年に一度世界中から集まり、多様な文化に出会い、互いに友好を深め合うことで、平和な世界の実現を目指そうとしたスポーツ教育者であり、平和主義者であった。復興当時、オリンピックの参加資格は個人であって国の代表ではないとされた。ここにも彼の世界市民主義（コスモポリタニズム）を信奉する平和主義者としての立場が示されている。彼はまた、古代オリンピアの祭典競技で取り入れられていた「聖なる休戦（エケケイリア）」と呼ばれた「オリンピック休戦制度」を参考にして、オリンピック開催中の戦争や紛争の休止を望んだ。しかしながら、当初の個人参加方式のオリンピックはあまり関心を呼ばず、資金不足のために万国博覧会の付属大会として開催された歴史が続いた。しかしながら、1908年第4回ロンドン大会から国別参加方式に変わり、それが関心を呼び、大会が大いに盛り上がることとなった。皮肉なことに、クーベルタンの当初の意図に反したオリンピックにおいてもナショナリズムが台頭することになったのである。

第1次世界大戦によってオリンピックは中止となり、スポーツによる平和希求という理想は実現が難しかった。さらに、1936年第11回ベルリン大会は、聖火リレーが初めて取り入れられた大会であるが、ナチスによって政治的に利用された大会としても有名である。第2次世界大戦後の1948年第14回ロンドン大会では、聖火リレーの復活に議論があったが、聖火リレーは平和希求の好機として再認識され復活された。この時、ギリシャのオリンピアでスタートした第1走者は、最初は軍服を着て銃を持っていたが、聖火を受け取る際に銃を捨て軍服を脱いでランニング姿でスタートした。このことによって戦争を放棄し、スポーツによる平和希求のメッセージを演出したのである。

しかしながら、時代は東西冷戦体制に入っていく。1952年第15回ヘルシンキ大会からソ連が参加し、メダル大国となった。この東西冷戦下のヘルシンキ大会では組織委員会は独自に「エケケイリア」の休戦制度を取り入れて宣言をしている。1956年第16回メルボルン大会では、同年のソ連によるハンガリー侵攻が大きな問題となった。ハンガリー選手団のオリンピック参加のために、国際オリンピック委員会（IOC）はオリンピック休戦を使って、ハンガリー選手団をプラハに逃がし、メルボルンに渡航させたのである。このように国際政治がらみで近代オリンピックは戦争と平和の間で揺れ続けてきたのである。

1964年第18回東京大会、これは日本の戦後復興と経済発展の岐路となった大会であるが、聖火リレーコースと最終ランナーによって日本の戦争放棄、東南アジアの侵略国への謝罪、新しい平和希求国家としての姿勢を世界に示すこととなった大会としても知られている。この東京大会では、聖火リレーはオリンピアで採火され、中近東を通り、インドから東南アジアを経て米軍占領下の沖縄に入り、そこから九州にリレーされたのである。日本を南北からリレーされて東京に集められた聖火リレーの最終ランナーは、当時、早稲田大学競走部の長距離走者であった坂井義則氏。彼は8月6日の原爆投下の日に広島の北部にある三次市で生まれたため、アトミック・ボーイというあだ名を頂戴した。この最終聖火ランナーによって反原爆・反戦のメッセージを世界に伝えたのである。

しかし、この後オリンピックは平和的には開催されない歴史をたどっていく。1972年第20回ミュンヘン大会ではアラブのゲリラがイスラエル選手団を襲撃した「ブラック･セプテンバー事件」が起きている。1980年第22回モスクワ大会、1984年第23回ロサンゼルス大会は東西圏のボイコット合戦になってしまった。IOCが明確に「オリンピック休戦（Olympic Truce）」を唱えたのが1992年第25回バルセロナ大会である。この年には旧ソ連邦が崩壊し、旧ユーゴスラビアも内戦状態に陥っていた。国連（UN）は制裁決議として旧ユーゴの選手達の対外試合も含めた禁止処置を発動した。これによって1992年バルセロナ大会にも参加できなくなるという問題が生じた。そこでIOCはオリンピック休戦を導入して、旧ユーゴの選手達の参加の道を開くことに成功した。1994年リレハンメル冬季大会の前年の1993年には、UNとIOCは連携して国連総会にて初めて「オリンピック休戦決議」を採択し、オリンピックの開始前の1週間と閉会式後の1週間の合計約1ヶ月間をオリンピック休戦期間として、いかなる戦争も紛争も休止するよう勧告したのである。こうして、夏冬のオリンピック大会の前年にUNとIOCは連携してオリンピック休戦決議を採択するという現在のシステムが構築されたのである。1998年長野冬季大会のオリンピック休戦決議によって、湾岸戦争の開戦が1週間伸びたともいわれている。2010年にはIOCはユースオリンピック大会を開設したが、2009年にはUNとIOCは連携して2010年バンクーバー冬季大会とシンガポール・ユースオリンピック大会の両方の大会のためのオリンピック休戦決議を採択している。こうして、現在では本大会とユース大会の両方のオリンピック休戦決議が採択される方式に変わってきている。2013年には2014年のソチ冬季大会と第2回南京ユースオリンピック大会のためのオリンピック休戦決議が採択される見込みである。

また、2004年のアテネ大会に向け、ギリシャとIOCは協力して2000年に「国際オリンピック休戦センター(IOTC)」を設立し、事務局をアテネに置いた。理事の一人に日本から明石康旧国連事務次長も加わっていた。現在もオリンピックの平和教育や反戦活動を展開しているが、ギリシャの経済危機によって活動に支障を来している。IOCは2006年トリノ冬季大会からオリンピック選手村にオリンピック休戦に賛同する選手・役員がサインできるような運動を展開してきてもいる。2012年第30回ロンドン大会でもこの方式は継続されていた。

ところで、1964年オリンピック東京大会の開会式では鳩が飛ばされていた。現在では本物の鳩ではなく、「象徴的に鳩を飛ばす」とオリンピック憲章に定められている。このように鳩を飛ばすのは一体何故かというと、それは鳩が平和のシンボルとされるからである。オリンピック休戦センターのシンボルマークもオリーブの小枝を加えた白い鳩が聖火の炎と共に描かれている。開会式ではジョン･レノンの名曲「イマジン」が演奏されたり、歌詞が朗読されたりする。それもこの歌が世界平和希求のピース･ソングであるからである。このように、オリンピックは平和希求のメッセージを世界に向けて発信する好機であることが理解されているが、日本のメディアはこのようなことにはあまり関心がなく、メダルの可能性やその色にしか注目しないのが残念である。

|  |  |
| --- | --- |
| 以上、オリンピックと平和について書いてきたが、しかしながら、非常に残念なことにUNとIOCの連携によって1994年から始まったオリンピック休戦決議は守られたためしがないのが事実でもある。オリンピック期間中も世界のどこかで戦争や紛争が休止したことがない。アフリカのダルフール地方やソマリア、中近東やアフガニスタンでは紛争が絶えない。UN総会では休戦決議がUN全加盟国の賛同で決議される一方で、アメリカ、ロシア、中国という大国を背後に戦争や紛争が続いているのである。よりによって2008年北京大会の開会式当日には、グルジア紛争が勃発している。グルジアに侵攻したロシアのプーチン首相は、その時北京の開会式に参列していたにもかかわらず、である。 | http://www.olympictruce.org/Pages/Files/images/IOTC%20new%20logo%20color-rings.jpg |

（国際オリンピック休戦センターのロゴマーク（オリーブの小枝を加えた白い鳩、バックの炎はオリンピックの5色の聖火、それにオリンピックのシンボルマーク）